

て編纂發行せられたる滿州朝鮮の地理歴史研究報告の第四冊にして去る四月の發刊に係る。收むる所都て五種の研究(一)契丹の國軍編制及び戰術(松井等)は兵種、徵集、兵力、團隊の組織任務及び名號、行軍戰陣と軍隊區分、宿營給養及輜重の六項に分つて一詳密なる研究を加へ(二)宋對契丹の戰略、地理(同氏)は燕雲十六州及び三關、遼、北漢、宋の相互關係位置、西方地區に於ける宋の警戒線、東方地區に於ける宋の警戒線、紡絮線としての塘潑、防禦線としての黃河、契丹の南方出動に關する地理の七項に分ちて之を研究し(三)金代北邊考、津田左右吉)は東北路招討司及び臨潢府方面の邊堡、蒲輿路及び上京路方面の二者に分ち(四)蒙古の高麗經略(箭内互)は太祖の救援、太宗の征伐、定宗憲宗の征伐、結言に分ち、附録として蒙使著古與の遺難、撒兒古と札剌亦兒古を添ふ(五)鮮初、東北境と女真との關係(池内宏)は前回の續編にして主として慶源府の復置と富居に於ける慶源府とを研究し之を鏡城古慶源間の驛站、慶源府内の地名、慶源府復置の事情、復置の慶源府と富居の慶源府、富居の慶源を退くるの諺、寧北鎮の設置等に分つて研究せり。以上五種の研究を以て三六五頁の大冊を成す其詳密の度知るべし。附圖として鮮初東北境經略圖添ふ。

●支那古代史

西山榮久補譯

本書は支那學研究の泰斗なる獨逸人 Friedrich Hirth 氏が西歷

千九百零七年に米國コロンビア大學に支那史を講ずる傍、其の研究を發表したる The Ancient History of China を邦文に翻譯したるものなり、譯者西山氏は是に最新支那大地理を著したることある支那研究の熱心家 Hirth の原著に親しむ機會多き吾人は今此の書の刊行あるを知りて多大の興味と注意を拂ふなり。原本は八章六十七節より成れるが、本書の精密丁寧に譯述せるは譯者の勞を多とすべし、譯文は務めて直譯を避け、なるべく雅馴且つ平易ならむことに務めたるも、文意改變の跡無く、而も往々にして Hirth 氏の記憶上の誤より來れる記述は一一之に補註訂正を加へ地名人名等の漢字も慎重の態度を以てこれを充當せり。原書愛讀の人士には必しも必要を認めざれども、一般讀書界の好讀物と価値ある書と謂ふに足らむ(三省堂發行價二、五〇)(以上那波)

の六朝墓誌書英

羅振玉編

本書は羅叔叙言が六朝時代の墓誌の特に優秀なるものを集めて其の文字拓本を玻璃版に附したるものにして、墓誌の盛なる李唐以前の面影を偲ばしめむとするものなり、收むる所宋にては懿德侯劉懷民墓誌、魏にては江陽王次妃石夫人、安樂王元詮、梁州刺史元演、元處妻、荊州刺史元暉、濟州刺史楊允、齊郡王元祐、宮第一品張、傳縣王遣女、敦煌鎮尉元悅、齊郡王妃常氏、東豫州刺史元顯魏、富平伯于曇、趙郡宣恭王元毓、瀛州刺史李彰の各墓誌

並に東魏の太原太守穆子巖墓誌、隋の陽邱簡侯蕭瑒墓誌の十八種
以て史實の機求に資すべく、又書學研究家の好資料たるを失はざ
るべし其の一一所藏者出處を記載せるは用意周到なりと謂ふべし

●光緒建元以來の撫年表

光緒元年乙亥の歲建元以來、光緒三十四年に至る間に於ける各
省總督交迭の順序を年代順に記載し見易き表とせるものにして、
例へば光緒二十三年にては、直隸は王文韶、西江は劉坤一、陝西
は陶模、閩浙は邊寶泉、湖廣は張之洞、四川は鹿傳霖、西廣は譚
鍾麟、雲貴は崧蕃、奉天は依克唐阿それ／＼總督たり別に總漕は
松椿、總河は任道鎔之に任せしが如く簡單なれども便利なる書な
り。

●章實齋文鈔

章學誠著

清朝に於ける史論家の泰斗なる章學誠の著として、文史通義の
名の喧々たるは今更嗶々の辯を要せざる所。而して本書は此の人
が撰述にかゝる文章を鈔録せるものに係り、昨年六月章氏の存稿
により印行せるものなり。收むる所樂野先生家傳、汪泰巖家傳以
下四十編、皆章氏の曾孫章季眞の珍藏する所にして、久しく見る
を得ざりしもの、今菊飲主人なる人の斡旋により之を人間に流布
するを得るは學界の慶事とせざるべからず。因に章氏の遺稿家藏
せらるゝもの仍廿巨冊あり、逐次出版の舉ありといふ。

●亭林顧先生小像

本書は詳しくは顧先生祠會祭題名第一卷子とも稱すべきものに
して、清朝の鴻儒顧炎武の祠堂を建設して之を祭祀せる際、追慕
の情を同じうせる學者名士の題したる文章小品を集め卷子とせる
ものありしを一一石版に附し原影のまゝ冊子本として出版せるも
のなり。顧炎武の祠堂は道光二十三年に創設せられ、癸卯十月成
る二十四年二月二十五日初めて祭典を執行し、苗夔、陳慶鏞、何
紹基、韓廷魁、湯鵬、朱琦等當代の名士此に與る。五月二十八日
顧氏の生日復此等の人々祭典を擧げて以來、同年九月九日、二十
五年三月廿九日、五月廿八日に之を行ひ、爾來毎年二月廿五日、
五月二十八日、九月九日の三回必ず此の舉ありて學名名士の來會
する者多く、此の卷に題名して去るを慣例とし、以て同次十二年
に及べり。然れば此の間に於て顧氏を追慕する學者名士の手蹟は
殆んど此の卷中に網羅せられ、雖如として當年の面影を憶ふの思
あらしむ。卷頭收むる所の題字亭林先生遺像の六字は何紹基の筆
に係り、寫眞とされる亭林先生中季小像は滄浪亭石刻、車秋船譜
の原圖となりしものにして、顧氏の族孫顧少瑛の珍藏に係る軸よ
り採りし因據正しき肖像なり。

●中書典故彙紀八卷

王正功輯

雍正十三年冬王正功が乙科を以て内閣中書の考試に應じ馬相如

第三卷 紹介

沈微涓、陳勾山諸氏と共に及第するや其の記念として中書の典故を編輯せむとす、偶此等人々他に出づるあり、即ち王氏自ら群書を搜りて中書に關する古史料を探究し、二十餘年の歲月を閲して乾隆三十年に至り此の八卷の書を編輯するを得たり、第一卷官制にては漢魏以來元明に至る迄の中書に關する官制上の沿革變遷を敘述し、第二卷第三卷の職掌の條下にて、周禮の内史外史以來の職掌上の沿革を探り、第四卷儀式にて朝廷に於ける中書の應對進退の儀序を精査し、第五卷恩遇にて、帝王の中書待遇の甚厚なる所以を説き一一實例を提擧し、第六卷建置には清朝の内閣が古の中書省に當り其の建置は明の永樂年間にあることより、主として清朝時代の内閣に關する沿革を叙し、第七卷題名にては明の太祖の吳元年以來の中書即丞相となりし人々の署任、轉任、辭官免官を年代順に排列し、乾隆三十八年李侍堯が西廣總督より入りて武英殿大學士となりし迄を記述し、第八卷雜錄にて以上に漏れたる史料並に王氏の考案を収めたり。洵に一部の中書省沿革史、參考に價する所蓋し少なからざるを覺ゆ、嘉業堂叢書中に收むるものなり。〔以上那波〕

●支那地學調査報告 (東京地學協會發行)

東京地學協會は、早く支那學調査の忽にすべからざるを知り、明治四十三年理學士石井八萬次郎氏を起して揚子江流域を調査せ

第三號 一七〇 (五一二)

しめ、其報告を基として、大正二年「揚子江流域」を出版せしが、明治四十四年更に大規模の調査を企劃し、石井氏に之を囑託したるも、恰も革命亂に會して之を中止し、大正二年より四年に亘り二回、理學士野田勢次郎氏等を派して揚子江と珠江との中間に亘る地域を調査せしめたり。是より先、協會の囑託を受けて踏査せる理學士山根新次氏一行の南支那東部、理學士野田勢次郎氏一行の浙江省及湖北省、理學士小林儀一郎氏一行の四川陝西山西、理學士福地信也氏一行の湖南省、工學士杉本五十鈴氏一行の湖南省に於ける報告あり、尙各積の材料を蒐めて、昨年中「中支那及南支那」を出し、同地方の地理地質の一般を世に紹介したるが、今や詳細なる報告書成れり。本書は三卷より成り、附圖二帙を添ふ。第一卷は湖南・廣西・廣東・江西四省(野田)、福建・江西・湖南・湖北・安徽・浙江六省(野田)、浙江省北東海岸寧波紹州附近(石井)、湖南省湘江流域(石井)、中支那及南支那地質(野田)の諸編、第二卷は南支那東部(山根)、浙江省錢塘江流域(野田)、湖北省大冶興陽州(野田)、湖南省湘江及資江流域(福地)、巴蜀盆地(小林)、浙江省海岸地(野田)、湖南省沅江流域(杉本)、湖北省西北部(野田)、陝西省及山西省(小林)の諸編を蒐め、第三卷は前記諸家の採集せる化石を基として、理學博士矢部長克氏が、理學士早坂一郎氏と共に別な研究せる南支那産古生物調査報告なり。主文は英文にして、別に邦文の摘要を添へたりと云へど、此の分は吾人未だ之を見る能は